

佐道明広・小針進著 『金泳三(元大韓民国大統領) オーラルヒストリー記録』

(平成18～19年度科学研究費補助金基盤研究C成果報告書)

本書は約4年間、19回におよぶ金泳三元大統領へのオーラル・ヒストリー（インタビュー記録）である。

日本でも、韓国でも、金泳三氏の評価は朴正熙氏や金大中氏に比べて、それほど高くない。特に、韓国では、金泳三大統領の任期末に韓国を襲ったアジア経済危機の影響もあり、評価が厳しい側面がある。

だが、朴正熙大統領の維新体制下や、全斗煥政権下での金泳三氏の闘いはもっと検証されてもよい。金大中氏に比べてあまりに過小評価されている。

また、金泳三大統領が断行したハナ会の解体、金融実名制、全斗煥・盧泰愚両元大統領の逮捕にまで至った「歴史の立て直し」などがなければ、金大中政権や盧武鉉政権の進歩政権は保守勢力からもっと激しい抵抗を受けていたであろう。その歴史的意味は再評価されてよい。

本書の中でも金融実名制実施にいたる極秘作戦や、北朝鮮の第一次核危機の際の米側とのやりとり、1989年6月のモスクワでの北朝鮮の許鏜祖国平和統一委員長との会談の経緯、日本の政治家の妄言に対し大統領が直接日本の首相に解任を迫ったことなど新しい事実や興味深いエピソードが記録されている。

韓国現代史の重要な各局面での金泳三氏の生の思いやその経緯を記録するという意味で本書の持つ意味は大きい。

評者も職業柄、インタビューでは常に感じる困難さがある。それは、新しい事実を引き出さなければならないという意識と、相手の気分を害してはインタビューがうまくいかないという葛藤であ

る。特に、金泳三氏のような性格の人物はへそを曲げると次のインタビューはうまくいかない。本書もそういう苦労があっただろうと思う。

自叙伝執筆とインタビューの差異の一つは、自叙伝執筆は自分に都合の悪い問題は避けるが、インタビューでは本人はあまり触れてもらいたくない問題にも果敢な質問をぶつけることで新たな事実や思いを引き出すことができるという点である。

本書を読んで少し残念なのは、質問者のスタンスが少し金泳三氏サイドに近寄りすぎてはいないかという点である。もう一步踏み込んだ質問をしてほしかったという部分も多い。

釜馬事態や、民主化推進協議（民推協）などにおける民主化運動の内実や在野勢力との関係、上道洞系といわれる家臣グループなどへの質問があまりなかったのは残念だ。これは質問者の世代の問題とも関係しているのかもしれない。

また、本書では黄長燁氏の韓国亡命は事件発生後に知ったとなっている。今日では、黄氏の亡命事件は、国家安全企画部が当初、東京の在日韓国大使館に駆け込む計画を準備していたことが明白になっている。その計画を大統領が知らなかったというのは理解できない。

金賢哲氏問題や、金融危機を事前にどの程度把握し、どう対応したのかなど、金泳三氏に耳の痛い問題にも言及はされているが、本人の責任も含めてもう少し突っ込んで聞いてもらえたらという感じを抱いた。日本の政治家との関係も、誰が酒に強かったとか、接待をしたというレベルの話が多く、それはそれで金泳三氏のキャラクターを示しているが、もう少し政策的な側面を聞けたらと思った。具体的な事実を突きつけて質問する作

業が少し足りなかったのではないだろうか。

金泳三氏がこのインタビューをどういう前提で受け入れているのかという疑問も抱いた。本書では金大中氏をはじめ各界の人物に対する率直すぎるともいえる感情表現が数多く見られる。金泳三氏の生の感情であることは間違いないが、本人に「歴史を記録する」という意識が強ければ、ここまでストレートに語るだろうかという疑問はある。特に金大中氏が亡くなった状況で、その歴史的和解が注目されている折り、余計そう感じるのかも知れない。

方法論において、金泳三元大統領に日本語での回答をお願いしたことが適切であったかどうか。金泳三元大統領が流ちょうな日本語を使うことは

承知しているが、微妙な感情表現などでは日本語ではやはり不十分ではないかと思う。

本書の意義を高めるためにも、疑問点や、さらに語ってもらいたい部分を整理し、再度、補充インタビューを試みてはいかがだろうか。

和田春樹東大名誉教授らのグループが韓国の民主化運動関係者 20 数人の口述記録を行う作業を、韓国民主化運動記念事業会と協力して行っている。こうした多数の関係者の「横」的な口述記録と、本書のような一人の対象者への集中的な「縦」的な口述記録が相まって現代韓国史研究の幅が広がることを期待したい。

(平井久志 共同通信)